

## 「ピシディアのアンティオキアに着く」

2016年06月09日

使徒言行録 13章 13節～16節 a。パウロとその一行は、パフォスから船出してパンフィリア州のペルゲに来たが、ヨハネは一行と別れてエルサレムに帰ってしまった。パウロとバルナバはペルゲから進んで、ピシディア州のアンティオキアに到着した。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。律法と預言者の書が朗読された後、会堂長たちが人をよこして、「兄弟たち、何か会衆のために励ましのお言葉があれば、話してください」と言わせた。そこで、パウロは立ち上がり、手で人々を制して言った。

バルナバの故郷キプロスの宣教活動は終わった。バルナバとパウロ、そして助手のヨハネはキプロス島のパフォス港から船出した。「船出してパンフィリア州のペルゲに来た」と書いてあるが、ペルゲは内陸にあり、船で来ることはできない。アタリアの港で下船し、陸路ペルゲに来たものと思われる。

ここで、同行していたヨハネは二人に別れ、エルサレムに帰ってしまった。なぜ、途中でエルサレムに帰ったのか。理由ははっきりとは分からないが、ヨハネがエルサレムに帰った理由は二つ考えられる。一つは、彼には宣教旅行はあまりに厳しく、ついて行けずに帰ってしまった。もう一つの理由は、彼は「マザコン」ではなかったかと私は想像している。彼の母マリアは、神殿当局が主イエスの命を狙っている最中、主イエスのために「最後の晚餐」の準備をし、場所を提供している。主イエスに対する深い尊敬を持っていた。息子のヨハネは母の尊敬する主イエスに興味を抱いた。主イエスがゲツセマネで真剣に祈っていた時、ペトロ、ヤコブ、ヨハネの弟子たちは眠り込んでしまった。しかし、ヨハネは青年らしい好奇の目を持って、主イエスを見つめ続けた。青年ヨハネによって、主イエスのゲツセマネの深刻な祈りを後世に伝えることができた。追っ手が来て、主イエスが捕縛された時、弟子たちは一目散に逃げ去った。ヨハネは逃げ遅れ、亜麻布に手をかけられたので、慌てて脱ぎ捨て、逃げた。彼は母の尊敬する主イエスに関わり続け、エルサレム教会に加わった。そして、バルナバとパウロはヨハネの純真な信仰に期待してアンティオキア教会に連れて来た。

ヨハネはキプロス宣教の厳しさを体験し、母が恋しくなったのではないか。帰るとしたら、出発したアンティオキア教会に帰ればよいのに、エルサレムに帰っている。母の所に帰りたかったのであろう。

使徒言行録 15章には、第二回目の宣教旅行に出かけるに際し、バルナバはヨハネを同行させたいと提案したが、パウロは反対したと記されている。二人の間で意見が激しく衝突し、結局、パウロとバルナバは別々の宣教旅行をすることになった。パウロはこの時の途中で逃げ出したヨハネに対し怒り、不信感を持つようになったのである。

パウロとバルナバはペルゲから進んで、ピシディア州のアンティオキアに到着した。宣教旅行にはシリアのアンティオキアから出発したので、「ピシディア州」のアンティオキアと言い、区別している。このアンティオキアにもユダヤ人が居留していた。二人は安息日に、例によってユダヤ人の会堂に入って席に着いた。律法と預言者の書が朗読された後、会堂長たちが人をよこして、「兄弟たち、何か会衆のために励ましのお言葉があれば、話してください」と言わせた。礼拝では、奨励したい者は自由に語ることができる、そこで、パウロは立ち上がり、手で人々を制して語り始めた。